

令和 6 年度 学校評価報告書（目標設定（実施結果））

	視 点	4 年間の目標 (令和 6 年度策定)	1 年間の目標	取組の内容		校内評価		学校 関係者 評価	総合評価 ( 3 月 24 日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と 課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	①ゼロから 1 を生み出し得る人間を育て、予測不可能で不確かな時代の担い手を育成する。 ②生徒が自ら取り組みたい事柄にじっくり向き合い、主体的に学びを深めることができる教育課程の研究に取り組む。 ③あらゆる教育活動をととして、他者とともに解決を図る「協働的課題解決力」を育成する。	①学校全体で「教科等横断的な深い学び」による生徒の汎用的な生きる力を育むための授業をより一層充実させる。 ②講座内におけるカリキュラム・マネジメントの工夫や改善により、探究的な授業実践の拡充を行う。 ③「協働的課題解決力」の育成を見通した探究的なオリジナル教材の開発と実践。	①教員・生徒間での授業テーマの共有とその浸透を図り、授業評価アンケート等を活用した定期的な振り返りと情報共有を行う。  ②教科内や教科間での情報共有を行うことで授業内容の過不足を見直しカリキュラムのゆとりを創出する。  ③教科の枠組みを超えた教材開発チームの発足と教材開発。	①授業評価アンケートは昨年度と同程度の高水準の回答であったか。 ①授業テーマが十分に浸透し、教科間での情報共有や振り返り等が行われ、次年度に向けた方向性を考えられたか。 ②教科会などで協議を充実させられたか。 ③プロジェクトチームの発足と教材開発ができているか。	①②「生徒による授業評価」の『教科等横断的な深い学び』の回答について、前期から後期にかけて生徒の理解度に改善がみられた。全体としても昨年度同様に高水準の回答が得られた。 ③教材開発チームを発足させ授業内容等の検討を進め、後期のヴェリタスⅠにおいて実施した。	①②今後も引き続き互見授業や管理職による授業観察、教科会での協議等を活用し、組織的な授業改善を進めていく。 ③他校や学校運営協議会等の外部からの意見も参考にしながらオリジナル教材のブラッシュアップを図る。	・目標はおおむね達成されている。 ・目標としていた教科間の枠組みを超えた教材開発チームの発足も意義があり、ステップアップが期待できる。	・生徒による授業評価が引き続き高水準の回答が得られたことから、教員や生徒に取組が定着してきたと考えられる。	・授業改善業務を学習推進グループに移管し、探究の授業を所掌するグローバル教育推進グループと連携することで取組をより充実させたい。
2	生徒指導・支援	④生徒が互いの存在を尊重し、だれもが居心地よく過ごせる環境を整え、健やかなメンタリティを育成する。  ⑤長期的展望を持ち、指示を待たずに主体的に行動できる、次世代をリードする人間にふさわしい資質・能力の育成を図る。	④個別支援が必要な生徒に早期対応できるよう、日常的な教育相談の充実を図ると共に、SC や SSW 及び他グループと連携した学校全体での生徒支援体制の構築を図る。  ⑤学習のみならず、部活動や学校行事で自主性や協調性・リーダーシップを発揮できるよう支援する。	④心理検査や適性検査に加え模擬試験や学校行事の振り返りの機会等を活用した日常的な教育相談を実施し、適切な支援につなげていく。 ④心理検査等の活用に向けた職員研修を行う。 ⑤挨拶など生徒への声かけをより積極的に行う。 ⑤戸陵祭の体育部門と文化部門において、ユニット長を中心に生徒の活躍の場を提供する。 ⑤生徒会本部役員を中心に壮行会を行うことによって、部活動を盛り上げる。	④SC や SSW、他グループと連携することができたか。 ④職員研修を実施し、活用することができたか。 ⑤生徒と教員間で十分にコミュニケーションを取って行事の運営を行うことができたか。 ⑤部活動に対して積極的に支援できたか。 ⑤挨拶など積極的に声掛けができたか。	④SC、SSW と連携し、教育相談の充実を図った。 ④ 4 月に心理検査、5 月に心理検査とその活用法研修を実施した。 ⑤挨拶など生徒への声かけは概ねできている。生徒から挨拶することも増えてきた。 ⑤体育部門・文化部門共に事前の打ち合わせ等によりコミュニケーションをとりながら行事運営ができていた。台風により文化部門は縮小した形になったが、一般公開した 2 日目は 4,000 人以上の来場者で盛り上がった。 ⑤壮行会を行い部活動の活躍を校内で概ね共有できた。	④SC との面談を希望する生徒が多く、限られた予約枠を状況等から優先順位をつけて対応した。 ④生徒の心理面を図る検査等で内容的に重なる部分のあるものについて整理を行う。 ⑤挨拶などを継続して行う。 ⑤文化部門でキャッシュレス決済を継続する。 ⑤大会告知をすることで、各部を応援する雰囲気づくりをする。	・目標はおおむね達成されている。 ・様々に支援が必要な生徒への手立てを引き続き考え、適切に対応してほしい。 ・生徒がよく挨拶をしている。	・サポートドックによる生徒の状況把握が速やかになり、身近な存在が声掛けを行えているが、支援を必要とする生徒が増えている。 ・キャッシュレス決済は教員、生徒ともに有効であった。	・SSW、SC と連携し、積極的に外部機関につなげていく。 ・キャッシュレス決済は継続し、文化部門の充実を図る。
3	進路指導・支援	⑥県内屈指の進学校として難関国公立大学への安定した進学実績を維持するとともに進学先として海外大学をも視野に入れた本校ならではの進学指導を行う。 ⑦ 3 年間を見通したキャリア支援のもと、進学後に役立つ資質・能力を計画的に養う。	⑥キャリア教育実践プログラムを精査し、目標に準じたプログラムを再構築、周知、共有することで、よりよい進路プログラムを実践することを目指す。  ⑥ガイダンスや進路行事を通して、広い視野で生徒が進路選択ができるように支援する。	⑥キャリア教育のプログラムを適切に用意し、生徒に目的を理解させて取り組ませ、実施後の振り返りにより、自身の変容を確認させる。  ⑥定期的な面談等を通して、生徒の状況を把握し、高い目標をもてるように支援していく。 ⑥実力テスト等の前後で日頃の学習を振り返り、	⑥生徒の自己評価による、生徒の取り組み状況や成果についての肯定的な回答の割合。  ⑥国公立大学の志望者数が 6 割を超えたか。また、海外への進路選択をする生徒がいるか。  ⑥国公立大学の合格者 150 名、難関国公立大学の合格者が 20 名を超えたか。	⑥知の探究講座などの体験を通して、学問が社会の中でどのように実践されているかを知り、自身の生き方を模索する一助となった。 ⑥ 国公立大学志望者数は 7 割であった。海外への進路選択をする生徒がいた。 ⑥国公立大学の合格者数 128 名、難関国公立大学の合格者数 12 名。	⑥体験内容を整理し、どんな生き方をしたいのかを考察する機会を設ける。 ⑥生徒が最後まで第一志望を諦めない指導を職員間で共有することが重要である。教員が、海外への進路選択についての情報等を幅広く調べ上げることが重要である。	・県内屈指の進学校として実績は出ている。また、海外の大学進学者が出てことは今後に期待できる。 ・知の探究講座の取組は是非続けてほしい。 ・海外研修も拡充の方向ですすめてほしい。 ・海外研修は生徒	・ 1, 2 学年全員が丸一日の校外で本物を見る活動は有意義であった。ヴェリタスの研究につながるものもあり、生徒の視野を広げることができた。	・海外進学者が出たが、海外進学の意義を学校として考えていく必要がある。

	視 点	4 年間の目標 (令和6年度策定)	1 年間の目標	取組の内容		校内評価		学校 関係者 評価	総合評価 ( 3 月 24 日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と 課題	改善方策等
		⑧国際性を育み、グローバルに活躍できる人間を育てる。	また、生徒の現状を定期的に確認させ、生徒がより高い目標を持つよう促し、進路実現に向けて計画的に支援していく。  ⑦よりよいツールを活用して、生徒の能力を多面的に測り、生徒の資質・能力の伸長に役立てる。  ⑧国際交流・異文化理解の深い学びと実践力の育成に取り組む。	自身の取り組みをよりよく改善する機会とする。 ⑥キャリアパスポートの活用を見直し、生徒が自己を振り返ったり、自身の将来を考えたりする機会を作る。 ⑦様々な側面から生徒の能力を測るツールを精選し、効果的かつ効率的な活用を検討する。 ⑧国内語学研修、海外語学研修、オンラインでの海外高校生等との交流を実施し、生徒に国際交流・異文化理解の機会を提供する。 ⑧英語4技能の総合的な習得を目指した授業を実践する。	⑦様々な側面から生徒の能力を測るツールを比較し、今後の方向性について検討できたか。  ⑧国内語学研修及び海外語学研修を実施できたか。また、オンライン交流を拡充できたか。 ⑧事後アンケートにおける参加生徒の肯定的な回答の割合。 ⑧取組による生徒の変容を把握する。生徒の自己評価による、自身の取組状況や成果についての肯定的な回答の割合。	⑦現在活用しているツールを精査し、新たな手立ての導入を検討できた。  ⑧国内語学研修（25 名参加）及び海外研修(11 名)を実施し、参加した全生徒から、自身の取組や成果について肯定的な意見や回答が得られた。	⑦今回決めたツールによって生徒の能力を把握し、それを一元化することで見える化し、どのように活用していくかを今後考えていく必要がある。  ⑧海外研修にあたっては現地校とのやりとりを密にし、より充実した内容での実施を模索していく。オンラインでの幅広い交流についても、今後も随時拡充の方向で進めていく。	が飛躍するきっかけともなるものであり、拡充の方向で進めてほしい。	・生徒を多面的に把握するためのツールを精選することができた。 ・昨年度に引き続き、海外研修は同じ学校を訪問校として実施することができた。	・次年度から精選したツールを運用し、その結果をどのように活用していくかを検討する。 ・アメリカの姉妹校との交流を本格的に再開し、更なる充実を図る。
4	地域等との協働	⑨大学や研究機関との連携を強化し、外部リソースを十分に活用して生徒の学びを深める。  ⑩近隣の小・中・高校との交流をととして本校の取組を還元し、地域の学びの拠点として、信頼される教育活動を実践する。	⑨高大連携を充実させる。 ⑨研究機関、企業等との連携を実践する。  ⑩学校HPを細やかに更新し、特に中学生とその保護者に、本校の魅力と特色がしっかりと伝わる状況を常に保持し続ける。 ⑪本校進学希望の中学生とその保護者に対し、学校説明会の内容を充実させる。	⑨グローバル教育推進グループが中心となって連携事業を集約し、効率化を図る。 ⑩広報情報グループとグローバル教育推進グループが連携を取り、特にSSH関係の生徒の活躍が伝わる内容の充実を図る。 ⑪学校説明会において、生徒サポーターの活躍の場を用意し、本校進学希望の中学生に対して、実体験によるリアルな説明が実施されるよう配慮する。	⑨外部の連携先を開拓し、連携事業を実施できたか。  ⑩⑪学校説明会後の来場者アンケートの評価が高いか。	⑨SSHⅢ期申請に向けて取り組む過程で、OIST 等、新たな大学や研究機関との連携に向けた調整を随時進め、次年度の計画等に盛り込むことができた。 ⑩SSHに関わる行事や校外でのヴェリタスツアー等、生徒の活動を随時学校HPに掲載した。 ⑩色々な行事を終えた後、速やかにHPを更新する流れが構築され、中学生やその保護者に対する情報公開がスムーズに進んだ。 ⑪外部の説明会2回、学校開催の説明会2回を無事に終了し、生徒サポーターの活躍もあり、来場者からは、高評価を受けた。	⑨今後も引き続き本校のSSH事業に有意義な外部連携を模索していく。 ⑩今後とも、現在の更新ペースを維持して行く。 ⑪来場者アンケートの回答などを参考として、さらに内容の充実を図って行く。	・生徒の活躍を校外に伝えるという点では、学校HPや学校説明会で評価されている点は意義がある。 ・地元の中学校で生徒が探究活動の発表や説明をしたことは中学生に大きな影響を与えた。効果的な地域へのアピールは公立高志願者増につながる。	・SSHの活動を通じて厚木市や近隣企業、また中学校等多くの外部機関と連携することができた。 ・HPや学校説明会を通じて、生徒の活動や本校の魅力を伝えることができた。	・今後は更に連携先を広げ、生徒の活動の幅を広げていきたい。 ・地元の中学校への探究活動のアピールを更に広げ、本校の取組を具体的に伝えていきたい。
5	学校管理 学校運営	⑫「4年間の目標」の達成状況を確認しながら課題を見つけ、学校経営の視点からグループを越えて組織として解決する力を強化する。 ⑬事故防止の取組を怠らず、地域の信頼を裏切らない。 ⑭組織として従来の働き方を見直し、生徒の成長という目的のために、職員が心理的ゆとりを持ち、主体的に学べる、常に変革可能な組織運営を目ざす。	⑫4年目の目標達成に向けた1年目の単年度目標を適切に進める。  ⑬職員発信による事故・不祥事防止研修会を企画、実施する。  ⑭職員の意識改革につながる研修を企画、実施する。	⑫企画会議で進捗状況を随時確認する。  ⑬各グループを母体とし、持ち回りで事故・不祥事防止研修会を実施する。  ⑭職員研修を年間行事に位置付け、タイムリーな内容の研修を実施する。	⑫学校運営協議会で目標達成状況を確認できたか。  ⑬事故・不祥事防止研修会をグループ主体で実施できたか。  ⑭研修会後の振り返りにより職員の意識を確認し、新たな気付きや変容が見られたか。	⑫今年度の目標はおおむね達成できた。グループの枠を超えての検討、協議ができつつある。 ⑬県教委が作成している「不祥事防止職員啓発・点検資料」をもとに、定例の職員会議ごとに職員への啓発を実施した。また、各グループによる事故・不祥事防止研修は、その時々で必要なテーマを取り上げ職員全体の意識向上を図ることができた。 ⑭STEAM教育に関する職員研修を実施し、職員の意識啓発を行った。	⑫今年度の課題を次年度に向けて検討し、引き続き取り組んでいく。 ⑬「不祥事防止職員啓発・点検資料」を基にした啓発だけでなく、日々のニュース記事などを職員全体で共有し合い、事故・不祥事防止に向けた環境を構築していく。 ⑭今後も、働き方改革の視点からも職員向けの研修を行っていく必要がある。	・職員の意識向上、意識啓発に向けた職員研修が実施できたことは評価できる。今後は、働き方改革の視点から職員向けの研修を行う等、継続的な研修活動を実施してほしい。	・研修を実施し、職員の意識啓発を行うことができた。 ・企画会議で学校としての課題や業務の見直しの検討を行うことができた。	・企画会議では引き続き、学校目標に照らして課題を把握し、グループの枠を超えた協議により解決を図っていく必要がある。